

美術の窓(55)

雪村と雪舟

大和文華館館長 吉川逸治

「雪舟」の特別展を開催することは、私の夢でありました。

雪舟の名作を觀賞しながら、彼を私淑したといわれる雪村の作品を思い合わせました。二人の巨匠は、表現のあり方は異なりますが、しかし共通する点もあるように思われます。

今回は、昭和56年の特別展「雪村一戦国乱世を生きた大画人一」と平成6年の特別展「雪舟」の図録に書きました私の挨拶文を一部抜粋して掲載することにいたします。

*

雪村は、戦国乱世にあって、東国の僻地に在住して、都の土を踏まず、作品も地方に散在して、都の文人、画人に知られず、かつその画跡は多様多種、一つ二つの作品にてはこの奇矯な禅僧画家の複雑極まる芸術の全貌を理解することの困難なることを感じます。雪舟に私淑する画家ですが、時代は降つて、現実に対する新しき興味いよいよ強く、東国の荒々しき気象、山水草木と鳥獸に親しみ、世俗の交りも嫌はざりし如く、田野の人々と親しんで、これら様々の事物、人間の生態と相貌をそのままに神仙図、禅機画の作中に活かし、高談笑声天地をゆるがせ、龍虎も咆吼し、時に身の蔬菜、走馬に筆を執れば、写形真に迫る。しかも、鎌倉の禅林に学んで、古

き禅画の遺風を偲び、如拙周文の画境に深く憧憬し、宇宙の真相を探求せんとす。筆は眼前の山谷雪景のうちに大氣を追ひ、白光の閃き、疾風の襲来を把へ、水流海波に共鳴し、宇宙の神秘を感じ、自然生命の脈動に戦慄するかと思像させます。そのために筆法の確かさ、墨色の微細な変化を得んと苦心し、中国の名画の伝承されるところを熱心に学んで、自分の画技を開かんと志す。その意図甚だ複雑にして、純然たる水墨画の域を越境するところあるやも知れず、同時に彼は東の国人として、北斎の先輩であり、大観の先導である。知らず、遠き縄文人の魂の彼のうちに宿れるやも。現世と神秘の両界に感応する魂の所有者たりしかと想像をめぐらす次第であります。

天心が雪村をば、雪舟と並び称せられるべき大画家と激賞して以来すでに久しく、具眼の士の鑑賞を喚び、その画跡を追ふ学者の研究は深められて参りましたが、なほ広く一般の美術愛好家の賞讃を得るに到っていない状態と存じます。しかも、その評価は欧米において著しく、近年その傑作が海外の美術館に所蔵される例もいくつかわられる程であります。

* *

禅人画僧雪舟等楊の出現が、応仁大乱の末世に、如拙、周文と禅



重文 雪村筆花鳥図屏風(部分)



重文 雪村自画像(部分)

林僧房に慎しやかに育成されてきた詩画軸の水墨画を大画面の芸術に大成することに貢献したことは、周知のごとくです。その最初の微が、四十歳代の彼が、大明国を訪れた際に、寧波から長路を北上して国都にいたり、健筆を揮つて実景精写に努め、公私の觀賞家たちの賞するところであったと思はれます。この四十歳代の壮年の雪舟が、日本禅人等揚と署名した四季山水図の大作四軸（東京国立博物館蔵）を二軸づつ前後二期に分けて皆様とともに觀賞させていただくことができますのは、この上ない幸福と存じ居る次第です。

けだし、画技に優れたのみならず、幼時より禅学の修行に親しんだ雪舟は、禅機よつて處する聡明さを發揮して、絵事の判断を誤まつことがなかつたと観ぜられませう。彼我の絵画観の相違を知悉して、處することの必要を晩年、弟子宗淵にまで書きのこしております。中国の絵画思潮は、すでに多年、三次元の處理に習熟してゐるのに対し、わが国では依然として、筆線にたより、二次元の處理に基礎をおく慣習から解放されていない点を指摘してゐます。「天ノ橋立」図は、老大家が後世に遺した最後の三次元處理の絵画の範例でありませう。

雪舟自画像(模本)
藤田美術館蔵

季刊 美のたより No.111

平成7年5月18日

発行 大和文華館